

全国の輸血を必要とする患者さんに必要な血液を必要な時に届けることはとても重要です。生命の維持に欠かせない血液を安定的に供給するための施策は血液事業の中心施策のひとつです。

さらに、このような安定供給の観点から、また、患者さんへの血液を介する感染症や副作用等を減らすため、血液製剤の適正な使用が求められています。

血液製剤は病院など医療機関という限られた場所で使われており、また、血液製剤の種類によっては、特定

の疾患を持つ患者さんのみに使用されているものもあります。このようなことから、実際には、献血によってどのように人が人を助けているのかは、一般の人からはなかなか見えにくいものです。

ここに紹介するのは、小児がんと闘った4歳の男の子のお話です。輸血のことを「アンパンマンのエキスだ」と言って、人から血液をもらうことに感謝し、病氣と果敢に闘ったことが綴られています。

血液事業に携わる関係者は幅広く、国、都道府県や市町村、日本赤十字社をはじめ、血液製剤の製造販売業者、製造業者、販売業者、実際に製剤を使用する医療機関、患者の方々、そして、献血に協力して下さる企業やボランティア、国民のみなさん。このように多くの人々の協力により、血液事業は成り立っています。ひとりでも多くの人を救いたい、そんなひとりひとりの思いがこれからの血液事業を発展させていくのです。

アンパンマンのエキス

輸血を支えているのは 善意の献血です



「献血してくれた人たちにありがとうの気持ちを伝えたい、小児がんとたたかっていたお母さんが日本赤十字社の献血ルームにメッセージを残しました。病氣や事故の治療に使われる血液は、献血によってまかなわれています。献血者が減少する傾向にある近年ですが、その重要性がなければ、日本の医療そのものが成り立たなくなってしまうという声はあります。」

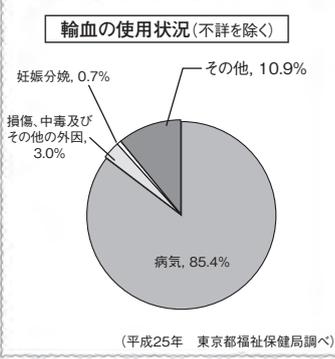
過酷な治療を支えた輸血

ある男の子の闘病記
「1歳男の子で、10ヶ月の誕生日、壮健な男の子が、突然、高熱、嘔吐、下痢、食欲不振、元気がない、泣き止まない、という症状が現れました。最初は、風邪か、感染症か、と判断されましたが、徐々に、意識がもうろうとし、呼吸が浅くなると、緊急入院となりました。入院後、血液検査の結果、白血球が減少し、血小板が減少していることがわかり、骨髄生検の結果、急性白血病と診断されました。入院後、抗がん剤治療を開始しましたが、副作用で嘔吐、下痢、食欲不振、元気がない、という症状が続き、治療が思うように進まず、退院を希望されました。主治医から、血液を輸血していただく必要があると説明されました。入院後、輸血を繰り返すうちに、元気が戻り、嘔吐、下痢、食欲不振、元気がない、という症状が軽減されました。主治医から、血液を輸血していただく必要があると説明されました。入院後、輸血を繰り返すうちに、元気が戻り、嘔吐、下痢、食欲不振、元気がない、という症状が軽減されました。」

「献血してくれた人たちにありがとうの気持ちを伝えたい、小児がんとたたかっていたお母さんが日本赤十字社の献血ルームにメッセージを残しました。病氣や事故の治療に使われる血液は、献血によってまかなわれています。献血者が減少する傾向にある近年ですが、その重要性がなければ、日本の医療そのものが成り立たなくなってしまうという声はあります。」

がん治療にもっとも必要とされる輸血

交通事故など不慮の災害などの時に輸血は必要です。一般にそのイメージが強くありますが、実際血液の使われ方では意外にも事故は少なく、もっとも輸血が必要な場面は病気の治療です。病気のうち半分ががん治療で、りょうすけくんがたまたまたったがん細胞もその一つでした。



献血の仕組みについて



献血ができる場所には、お医者さんや看護師さんの他にも、呼びかけなどをするボランティアの方がいます。献血には、一度でも輸血を受けた人は献血できない、という決まりがあります。献血によって生きる力をもらった人が、ボランティアで献血の仕組みを支えている人も多くいます。



献血された血液を患者さんに輸血できるように、血液の安全性を検査し、病院に届けるための準備をしています。また、献血をしてもらった血液を成分ごとに分けて目的にあった輸血用の血液を作ったり、保管したりする大切な役割もあります。



血液センターから輸血を受け取る患者さんには輸血を行います。病院では入院をしている人の手術用や、交通事故などの緊急時に血液が必要になるため、血液センターと密接に連絡を取り合っています。緊急時に備え、より多くの血液を確保する必要があります。

(平成23年度版「けんけつHOP STEP JUMP(生徒用)」より)